時代の反映が窺はれる」と語った。

帝展、日本工芸美術展開催に先立って、十月六日、本校講堂で帝国美術院会議が開かれ、予算も一万三千円が計上され、翌年からの帝展第四部設置を会員は満場一致で可決した。日本工芸美術会の創立と展覧会の開催が帝展第四部実現に大きく寄与し、目する方向が違うかに見えた本校関係者の工芸家の一致団結からその力が生れたと言えよう。

⑰ 東方絵画協会

大正十五年六月、日中両国画家（伝統的中国画と日本画の分野）の提携による東方絵画協会が成立し、日本側の事務所が本校文庫内に置かれた。左記は昭和三年当時の同会組織である。

東方絵画協会（東京）上野公園東京美術学校文庫内
（北京）宣武門内温家街一号

日本部（会　長）子爵清浦奎吾
（幹　事）正木直彦、川合玉堂、横山大観、小室翠雲、結城素明、荒木十畝、小堀鞆音、竹内栖鳳、都路華香、菊池契月、山本春挙、渡辺晨畝、下村観山

中国部（会　長）徐世昌
（副会長）汪大燮、熊希齢
（幹　事）江庸、周肇祥、顔世清、陳漢第、陳年、凌文淵、金紹基、王一亭

（『文学博士中村久四郎氏調査・現代日本に於ける支那学研究の実情』昭和三年十二月。外務省文化事業部）

大正七年、日本画家渡辺晨畝と金紹城ら北京の画家たちとの交流に端を発する日中画家交流運動は、同十年の第一回日華聯合絵画展覧会（北京）、同十一年の第二回展（東京）、同十三年の第三回展（北京）、同十五年の第四回展（東京、大阪）と、日中両国交互の展覧会開催によってかつて無い程興隆した。第三回展あたりから外務省対支文化事業部が支援することになり、したがって、展覧会は半官半民的性格のものとなり、日本側は帝展日本画部の重鎮が参画し、正木直彦がそのとり纏め役となったが、当時度々中国旅行を試みて中国の画家や学者と親交のあった本校教授大村西崖（吉田千鶴子著「大村西崖と中国」『東京芸術大学美術部紀要』第二十九号。平成六年三月、参照）もそれに協力し、また、本校文庫主任北浦大介は正木を補佐して実務を担当した。かくて両国画家の組織を確立することになり、東方絵画協会が成立したのであった。中国側の中心人物は前出の金紹城であったが、彼はこの年、東京での第四回日華聯合絵画展を了えて帰る途中上海で病死した。そのため、同年十月十七日には本校で追悼会と遺作の展示が行われた。金紹城没後、北京では金の息子開藩とやはり北京画壇の大御所である周肇祥との間で対立が生じ、東方絵画協会は北京で開催を予定していた聯合展が開催できなくなった。それ以後、同会は変則的な展覧会を開いたが、種々の障害が生じ、昭和五年以降は同会は日本側の団体としてのみ存続することとなった。